不思議の国の藍琉

朱音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不思議の国の藍琉

【Ｎコード】
Ｎ６７９５Ｇ

【作者名】
朱音

【あらすじ】
ごくごく普通に高校生活エンジョイ中の１７歳、藍琉。ある日兎耳の生えた人間を見つけ、興味本位で追いかけたら不思議の国へ！？―不思議の国の住人と、藍琉が織り成す一風変わった世界へようこそ♪６／２３次話更新致しました☆

プロローグ―やってきちゃった！！―

アリス

アリス　僕らのアリス

君はもうこの世界にはいない

何処を探してももう　いない

けれど物語は終わらない　終わりはしない

君ではない誰かへと、受け継がれていく

僕らがいつか　繋がれるまで―…

†　　†　　†

嗚呼、これは一体何のｒｏｍａｎ＜絵空事＞なんだろうね？

うんざりしながら私はもう一度目を擦る。
うん、分かってたよ？何回目を擦っても、ほっぺたつねっても、同じ物しか目に入らないことくらい。

だけどさ？コレはないだろ。いくら何でも、流石にコレはないだろ。

私は兎に角混乱していた。

だって、ねぇ？兎の耳の生えた明らかおかしな人が走ってたから、興味本位で追いかけてみたら、ズボッて穴に落ちて、目が覚めたら薔薇の花畑だよ？びっくりするでしょ普通。

あ、紹介が遅れて申し訳ない。
私は藍琉＜アイル＞。女の子っぽくないうえ日本人離れした名前だってよく言われるけど、当然よ。だってフランス語のａｉｌｌｅ＜翼＞からとった名前らしいもん。まあそれでも歴とした純日本人なのは確かだから。覚えておいて。ここ重要！
ちなみに名字はまだ秘密。特に秘密にする意味なんてないけど、そんなの気分に決まってるでしょっ！

何だか大分脱線しちゃった感が否めないけど、とりえず今私は危機的状況に陥っている。

「一体何処なのよ此処…」

頭を抱える私。
何かモロ異世界ですとかそんな感じっぽいんですけど…

てか考えても答えなんて出ないんじゃないかしら。
だったら私悩む意味無くない？

「何か…探検に来たみたいでわくわくするっ！こうなったら隅々まで探索してやろうじゃないか。わひょーい！」

ネガティブになんかなってやんないんだからっ！私が落ち込んでると思ってた人、残念ね！

意気揚々と右手を上げて、いざ行かんと張り切って一歩踏み出した丁度その瞬間だった。何者かの声が降ってきたのは。

「予想に反して随分元気な女の子だね。びっくりだよ」

言ってる割には声は抑揚が無い。絶対驚いてなんかいないだろ。

ってか誰よ？人が折角ドッキドキ☆の探検に出ようとしてたのに出鼻挫くような
ことしやがって。

私は辺りを見回した。が、人影は見あたらない。

「何処見てるのさ、お嬢さん」

こっちこっち、と聞こえる方を見上げる。
太いしっかりとした木の枝の上に人がいた。

「ええっ！？何で木の上？」

私が叫ぶと、つっこむ所はそこなんだ？と愉快そうな声が返ってくる。

「Ｂｏｎｊｏｕｒ、ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ＜こんにちは、お嬢さん＞」

木の上の人は、楽しそう、というより愉快そうにそう言って、木から優雅に飛び降りた。

「！！？」

ちょっと待ってよ！かなりの高さだと思うよ？私的に！下手に着地したら骨バッキバキだって！てか最悪打ち所悪かったら死ぬって！！

私は反射的にぎゅっときつく目を閉じる。
しかし聞こえたのはベシャッという音ではなく、トンッという軽やかな音。
私は恐る恐る目を開けた。

「あはは、驚いたー？大丈夫、俺このくらいじゃ死なないし、むしろ死ねないから」

低く、甘い声色。
目の前に降りたった人の風姿を、私はまじまじと見た。

まず目に留まったのは目を奪われるような美しい紫。派手な感じがするのに、それでいて上品な、紫の髪。
染めた…って感じじゃないわね。もしかして地毛？

「地毛だよ」

「うっひゃあぁ！？」

今！今、明らか心読んだだろ！！

「違うよ？顔に書いてあっただけ」

何で私の心ん中丸見えなんだぁぁぁぁ！

慌てふためく私の様子を見て、その人物はにやにやと、そう、にやにやと、月を思い出させる黄金の瞳を細めて面白そうに笑っている。

ん…？……あれ！！？

私は私を見つめる人物に、ありえない物を見た。

「み、耳に…尻尾！？」

「気づくの遅くない？」

すかさずツッコミを入れられる。だってしょうがないじゃない。髪の毛にばっかり気を取られてたんだから。

ピンクに近い紫とピンクのしま模様。はっきり言ってかなり派手。コスプレかと思って見ていると、う、動いたっ！！

「え！えっ？う、動っ！？何で！？」

「だって俺、猫だもん」

さらりと言われ、耳を疑う。

「猫ぉ！？」

「そ。俺はチェシャ猫。ミシェルって呼んでよ」

チェシャ猫―ミシェルは藍琉の前に跪き、挨拶代わりにその手をとって口づけを落とした。

そういった事に全く馴れていない藍琉は狼狽える。

名乗られたんだから…私も名乗るべきよね？なんかめっちゃ言えって言ってるような視線感じるし…。

「私は藍琉」

「ａｉｌｅ？素敵な名前だね。どこまでも飛んでいけそうだ」

「まぁあながち間違った解釈でもないけど…残念ながらフランス語じゃなく私の名前は日本語よ。まぁフランス語のａｉｌｅからとってはいるけど」

「ふぅん。いいね。俺なんてｍａｓｓａｃｒｅ＜殺戮＞からとった名前さ」

え？ここっこむべき？つっこんでいいの？

困っている私を見かねたのか、ミシェルは口を開いた。

「そういえば藍琉、白兎を追いかけなくていいの？さっきあっちへ向かったよ」

「白兎・・・？あっ！そういえば！すっかり忘れていたわ」

このままチェシャ猫を放置していいのかと、ちらりとミシェルを

見ると、ミシェルは口を半月形にして、胡散臭い笑みを浮かべた。

「いってらっしゃい、藍琉」

そう言い残すと、チェシャ猫は消えた。

「えっ！消えた！？」

かかか神隠しっ！？いやでもいってらっしゃいって言ってたし…まあいっか。

私は白兎が向かったという方へ足を向け走り出す。

なんだかとても、不思議な気分だった…。

最初にいた木の上で、過ぎ去っていく藍琉の背中を見送り、チェシャ猫は面白そうに笑った。

「Ｂｉｅｎｖｅｎｕ　ａｕ　ｐａｙｓ　ｄｅｓ　ｍｅｒｖｅｉｌｌｅｓ＜ようこそ、不思議の国へ＞」

そして今度こそ、消えたのだった。

プロローグ―やってきちゃった！！―（後書き）

皆様こんばんは☆朱音です＾＾
大分前から書いていたアリス小説を、掲載する事にいたしました♪
今年は受験生ですので更新が遅いと想われますが、何卒よろしくお願い致します、（○、・ｖ・）人（・ｖ・，●）ノ

←ブログ、始めました←
ｈｔｔｐ：／／ｍｂｌｇ．ｔｖ／ｃｒｉｍｓｏｎｂｉｒｄ／

第一幕―チェシャ猫、私を導いて！―

ああもうっ！やっぱり離れすぎちゃったのかも…。いっくら走っても白兎なんて見つからない！

私はひたすら走っていた。見ず知らずの土地を、一人で。

正直なところ、私は内心かなり焦っていた。やっぱり知らない土地で一人なのは心細いし、怖い。

無理言ってミシェルについてきてもらっとけばよかったかしら…。

そもそも何で私、こんなに必死になって白兎を探してるの！？

…チェシャ猫ミシェルが白兎を追いかけないの？とか言ったからだ…。

そう思い至った私は、イラっとして叫んだ。

「チェ～シャ～ねぇ～こぉ～」

私の恨みがましい低い声が森の中に木霊する。

「呼んだー？」

期待なんてしてなかった。返事なんて全くもって予期していなかった私は心臓が飛び上がりそうになった。

「うっへあぁぁぁぁ！！？」

「うっわー。面白い叫び」

我ながら色気がないなと思ってますよ、ええ。
それにしたってミシェルってば某読みすぎだと思うのよね。

目の前に突然チェシャ猫が現れる。

「お、おお驚かさないでよっ！てか何で居るの！？」

「藍琉が呼んだからね」

まさかずっと後をつけてたの…？もしかしてミシェルってストーカー？

「あっ、今失礼な事考えたでしょ」

若干・・・というより大分引き気味の目でミシェルを見ていると、シニカルな笑みを浮かべながらミシェルが言った。

「酷いなー藍琉。君が不安になってたら可哀想だなと思って見に来てあげたのに」

前言撤回。この猫神だわ。

「不安だった不安だったよもうっ！わかってるなら最初から一緒に来てくれれば良かったじゃない！」

ぁー…どうしよ。安心したら涙が出そうに…。どーでもいいけど私ってホント可愛げのない言い方しかできないのね。ちょっと自分に失望。

「ダメだよ藍琉。俺がずっと君と一緒にいたら、この世界の他の住人が嫉妬するからね」

「…はぃ？」

何だかイマイチ話が見えないんですけど？
私がそんなにも皆から嫉妬されちゃうくらいミシェルって人気者なの？まあ確かにすんごい美形だけどさ。

「藍琉は人気者だからねー。君がこの世界に来たコト、住人はみんな知ってる」

「え…？」

でも私チェシャ猫以外誰とも会ってない…。それに人気者はミシェルなんじゃないの？

私の頭の上には？マークがさぞ沢山あったのだろう。
ミシェルは面白そうにニヤニヤ笑いを浮かべて私の様子を伺っていたが、やがて再び口を開く。

「藍琉―異世界の存在がこの世界に遣ってくれば、住人はすぐにその事に気づく。なんていうかさ、わかるんだよ。あ、誰かきたーって」

チェシャ猫の言い方からすると、異世界人はちょこちょこやって

くるのかしら？
ん？ちょっと待って。私のこと異世界の存在って言った？てことは何？やっぱここ実は異世界でしたとかそんなありきたりな感じ？

「ありきたりでごめんねー」

「うはあっ！だから心読むのやめようよ！！」

びっくりするじゃん！

「あははー。藍琉、ここは君が生きてきた世界じゃない。君が今立っているこの場所は、不思議の国の“チェシャ猫の森”」

「森…？」

「そ。さっきまで薔薇とかあったケド、ここは歴とした森さ。そんでもって俺の生息地？」

疑問系？
まあ話が逸れてしまいそうだしあえてつっこまないでおこう。
代わりに、聞かなきゃいけないことを今のうちに訊ねてしまわなくちゃ！

「この森…一体何があるの？森を出たらどうなってるの？」

「さあね。どうなってると思う？」

ミシェルはイラッとくるくらいにやにや笑っている。どうやらまともに答えてくれる気は無いみたい…。

「森の外って言ったって、何処に出るかで何があるか変わるでしょ？俺それらをいちいち説明すんの面倒くさいし、それにキリがないじゃん」

まあごもっとも。

愚問だったって訳ね。じゃあちょっと質問の範囲を狭めてみようじゃないの。

「言い方を変えるわ。私は何処へ行くべきなの？」

「うーん。藍琉、君は何処に行きたい？」

聞き返されても困るって！わからないから聞いてるんじゃない。全く。

「えー？だって君が何処に行きたいかによって俺の答えも変わってくるし」

「じゃあ白兎とやらは何処へ行ったの！？」

ひねくれてるわねミシェル…

流石の私もちょっとご機嫌ナナメよ？

すると今度の問いかけは彼のお気に召したのか、ミシェルは嬉しそうな顔でポン、と手を叩いた。

「ああ、白兎ならトランプの城にいるさ。きっと」

「！じゃあトランプの城へ連れてって！」

ミシェルはこくりと肯く。

「分かった。おいで、藍琉」

ミシェルは私の前に手を差し出し、満足げに笑いながら私の手を取って歩きだした。

第一幕―チェシャ猫、私を導いて！―（後書き）

こんばんは、朱音です♪
更新しようとふと時計を見たら、あと5分で日付を跨ぐところでしたゞ（・ω・、；）ノびっくりです！
今回は結構早く更新できましたよ☆
チェシャ猫と藍琉の掛け合いは、書いててとても楽しいです♪
携帯で書いてる下書きでは既に他のキャラも出てきているのですが、ミシェルが実は一番動かしやすいです。気ままなところとかがたまに自分と似ていたりするからかな？（（笑

さて、次回は新キャラ登場ですっ☆
みんなが知ってるあの子です！
一体誰が登場するのか、予想しながらお待ち下さい♪

それでは皆様、次話でまたお会いしましょう＾＾ノシ

第二幕―私と猫と紳士―

一体どこまで続いてるのよこの森…。
ずーーーっと歩きっぱなしなのにさっきから全っ然城なんて見えないんですけど？

「ミシェルさーん」

「ん？何藍琉、どうかした？」

ミシェルは私を見ないで聞き返す。立ち止まってもくれないあたり鬼だ。

「どうかした？じゃないわよ！城の頭も見えてこないんですけどっ！？」

私はミシェルを睨みながら抗議する。

「仕方ないじゃない。遠いんだから」

「遠いって…一体後どれくらいで着くの？」

一時間くらいで着くかしら？もう流石にこれ以上は歩けないかも・・・。

自転車使ってばかりだったから、歩くのがこんなに疲れるなんて思ったの久しぶり。

「んー…」

歩きながらチェシャ猫ミシェルは唸る。
たまにぴくぴく動く耳が何だか可愛らしい。ってそんな悠長なこと言ってられないんだけどね。

「ちゃんと歩いたことないから正確なところはわかんないけど…5時間くらい？」

「そんなに歩けるかこのドアホ猫っ！！」

ツッコミはタイミングが重要よっ！…じゃなかった。このアホ猫ってば乙女にどんだけ歩かせる気よ？

「えー」

「えーじゃないっ！常識的に考えて乙女がそんなに歩けるわけないでしょ！」

何でそんな不満げな顔されなきゃなんないのよ。不満があるのはこっちだから！

「そんなに怒んないでよ藍琉。俺、消えないでちゃんと一緒に歩いてあげてるじゃん」

確かにそうだけどね。もしかして前に一緒にいてくれなかった事気にしてるのかしら？

「それとこれとは話が別」

でも今の問題は一緒に居る居ないじゃないでしょ。悪いけどこれ

だけはいくらミシェル相手でも譲れないわ。

「うーん。じゃあさ藍琉、お姫様だっことおんぶだったらどっちが好き？あ、俵担ぎでもいいけど」

はい？まさかそれらのどれかをしろと？

「どれも嫌なんだけど…」

当然の私の答え。

ミシェルはにんまり顔をする。

「じゃあ5時間歩く？」

「お姫様だっこで！」

ミシェルめ…初めから選択権ないじゃない。くっそー。余裕感じるあのにやにや笑い…腹立つわ。

「しっかり掴まっててね。落ちても責任とらないから」

「ええっ！？ちょっと！落とさないでよっ！？私まだ死にたくない！」

「だぁーいじょうぶ。暴れなきゃ落ちないって」

信用できないんだけど！！まさかの主人公死亡なんてことにならないでよ！？そんなことが万が一あったら呪ってやるんだから！

抱きかかえられた私はミシェルの首にぎゅっとしがみつく。

ミシェルはぐっと足に力を入れると、そのまま

「とっ、飛んだぁぁぁぁぁぁ！」

私は驚きのあまり叫んだ。

何？何これ？かなり軽やかに飛んだよね今？ここ既に地上５メートルは軽く越えちゃうと思うよ？

「違うよ藍琉。飛んだんじゃなくて、跳んだのさ」

ミシェルは木の枝を巧みに利用しとんとん木々の間を渡っていく。その素早さといったらさながらジェット機。ミシェルは何だかとても楽しそうだ。・・・私とてもじゃないけど笑ってらんないんだけど。この情況でミシェルの様子を見れただけでも尊敬に値するよね？

常識外れ過ぎでしょ！…いや世界違うみたいだし私の世界の常識が通用しないってだけかも。

そのまま３０分程すると、段々ぼんやりと城が見え隠れし始めた。このくらい経つと流石に私もこの状況に慣れ始め、下の景色をちらちら見られるだけの余裕ができるようになった。…とは言ってもミシェルが余りに高速すぎるから、下を見ても緑の何かがあることくらいしか分からないのだけれど。

「…あ。そういえば言い忘れてたことがあった」

軽快なリズムで木々を渡りながら、不意にミシェルが口を開く。
長らく会話が無かったからこんなに近いのにミシェルの存在忘れてたわ。ごめん。
ミシェルはそんな私のかなり軽い懺悔(ざんげ)を知ってか知らずか、そのまま続ける。
「俺、城の前までしか案内しないから。城の前まで藍琉を連れていったら消えるんで後は自分で何とかしてね」
「ええっ！？何て無責任な！私一人じゃこの国の礼儀作法なんて分からないしどうしたらいいのか分からないわ！」
私は一人になりたくなくてミシェルを見上げて必死に抗議するけど、ミシェルはにやにやと笑うだけ。まぁチェシャ猫って呼ばれるくらいだしね。
「いいかい藍琉、忘れてはいけないよ？これは君の旅であって、決して俺の旅じゃない。俺は確かに君と関わり君の運命と交わるけれど、旅をするのはあくまで君自身。あんまり俺を頼ってばかりは良くないね」
咎めるような口調じゃない。ミシェルは笑ってる。でも諭された私は急にしゅんとなってしまった。
「ほらほら、落ち込まないで…おっと」
ふとミシェルが言葉を止めた。今一瞬何かが私達の横を掠めてミ

シェルの体が不自然な方向に傾いたのは気のせい・・・？
ミシェルがあれは…と呟く。訝しんでミシェルの目線の先を目を凝らして見てみると、黒い人影のようなものが映った。

「藍琉、城へ行くのはちょっと延期にさせて」

「え？」

「大丈夫だって。白兎は逃げないし」

どうしたんだろミシェル。そんでもってやっぱり私に拒否権は無いわけね？

ミシェルは木と木を上手く渡りながら、トントンとリズミカルに下に降りていく。

「はい着いた」

ミシェルは壊れものでも扱うかのように丁寧に私を地面におろした。
服をぱんぱん払って前を見ると、見知らぬ紳士がこちらを見ていた。

「Ｎｉｃｅ　ｖｏｕｓ　ｒｅｎｃｏｎｔｒｅｒ，ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ＜初めまして、お嬢さん＞」

すっと慣れた感じで手を差し出される。
私は戸惑いながらも手を出した。

「えっと…初めまして」

私は見知らぬ紳士と握手する。
紳士…とはいっても顔立ちは私と同じくらい？まだ幼さの残る顔立ちで、ミシェルよりは年下に見える。

漆黒の髪に紫眼。タキシードを上手に着こなしていて、誰から見ても紳士な目の前の青年。でも私の二つの目がとらえていたのはそんな容姿では無かった。
―大きな黒いシルクハット。その青年紳士は、真っ赤な大輪の薔薇の花と、細長い青色の二枚の鳥の羽など装飾が派手な帽子を被っていた。

「リーエン、これ、返すよ」

私の脇にいたミシェルが何かを紳士に投げる。
それはシュッと小気味良い音を立て紳士に向かって飛んでいった。

「ああ、わざわざどうも」

いつ捕ったのかしら・・・？私には彼の紳士の腕が動いたようには見えなかった。
けれどきっと動いていたのだろう。彼の手にはいつの間にかダーツが一本収まっていた。

・・・一体どんな早業よ。

「俺と藍琉に当たったらどう責任とってくれるのさ。いきなり飛んできて俺かなり焦ったんだけど」

ぶーぶー文句を言うミシェル。しかし紳士は全く意に介さず。

ってかさっき何か掠めたと思ったらあのダーツだったの！？ちょっと！当たったら危ないじゃない！！

「だってそうでもしないとミシェルは俺の存在に気づきもせずにそのまま通り過ぎていっただろ？それに例え本気で当てようと思って投げたってどうせ当たらないじゃないか。現に今まで一度もミシェルに俺のダーツが命中したことはないし」

ミシェルって意外とすごいの？でも確かに言われてみると飄々とした様子で避けてそう・・・。

「俺がキミのダーツを避けられなかったらこの世界は終わりでしょ」

ねえちょっとそれは流石に失礼だと思うけど！

「もういいからミシェルは少し黙っててよ。俺今この子とお話の途中なの」

ちょっと苛立った様子でぴしゃりと言い放つ紳士。私も今のはミシェルが悪いと思う。

気を取り直して紳士は私に向き直り再び口を開いた。

「自己紹介が遅れてごめんね。さっきミシェルが言った通り、俺はリーエン。シャプリエ・サジェッセ＜イカレ帽子屋＞なんて呼ぶ住人もいる。“アリス”、君の名前は？」

優しい眼差しを向けられ私は不覚にもドキッとしてしまう。

「私は藍琉。アリスじゃないわ」

「藍琉、よろしくね。唐突だけど、ヴィオレ・ミシェル＜殺戮の紫猫＞…チェシャ猫からこの世界のこととかもう色々聞いてるのかな？」

「俺は何も言ってないよ。面倒くさいし。それに教えるのは“帽子屋”の役割でしょ？」

私が答えるより早く、ミシェルが言った。

それにしたってさ、面倒くさいは酷くない？正直なのはいいことだけど、正直すぎて逆に腹立つぞ。

「…はぁ。相変わらず面倒くさがりだな、君は。ずっと藍琉と一緒にいたならある程度教えておいてくれれば良かっただろ」

帽子屋―リーエンが大きなため息をつく。

「立ち話も何だし、今からお茶会においで、藍琉。あとミシェルも」

えっと…。話の流れにいまいちついていけてないよ私。何このものっすごい取り残されてる感。

「ほら、行くよ藍琉」

ミシェルが私に手を差し出す。多少の疑問を持ちつつも私は素直にその手をとって歩きだした。

だって二人とも歩くの早いしさ。置いて行かれていつの間にか迷子になってるなんてごめんだもの。

けれどそんな心配は無用だったようだ。道はずっと一本道で、つきあたりを曲がったらそこはもうお茶会の会場だったのだから。

「わ・・・あ」

思わず感嘆の声が漏れる。

目の前に広がるのは、あまりに豪華な光景。

メリーゴーランドみたいな屋根に、美しく磨かれた真っ白な大理石の床。中央には１０人は軽く座れるだろう大きなテーブル。それだけでも十分びっくりだというのに、テーブルには真っ赤なテーブルクロスに高級感溢れるティーポットにカップ、おいしそうなお菓子が沢山並んでいる。

「さ、藍琉。座って」

リーエンが椅子を引いてくれる。うわ…椅子まで高級だよ。どんだけ金持ちなのよこの人…。

一般庶民の私にははっきり言ってかなり気がひけるけれど、椅子引いてもらっちゃってるし、とりあえず促されるままに私は椅子に腰掛けた。

そしてミシェルとリーエンも座ったところで、お茶会っぽい会合が始まった。

第二幕―私と猫と紳士―（後書き）

こんばんは、朱音です♪
小説を執筆してるといつの間にか日付が変わりそうになってるのは何故でしょうか？

さてさて今回、新キャラのご登場です☆
予想通りの人が出てきちゃいましたか？
帽子屋のシルクハットのデザインは、とある漫画のドラマCDから案をもらっちゃいました＾＾その漫画もアリスがモチーフになっているところが多々見受けられるのですっごい好きな漫画です♪

次回はそんな帽子屋君と、藍琉、ミシェルとの楽しく愉快な（？）掛け合いですv
それでは、また次幕でお会いしましょう＞w＜ノシ

第三幕―教えて帽子屋―

「さて、まず何から話せばいいのかな？」

開口一番、帽子屋はそう言って口火を切った。

カップに注がれ上品な香りを漂わせる紅茶を覗き込むと、困り顔の少女が映っている。

・・・私今こんな微妙な顔してるのね。

「んー。リーエン、キミもう少し質問範囲を狭めてあげないと多分藍琉何を聞けばいいのかごちゃごちゃしちゃって全然わかんないと思うんだけど」

ナイスミシェル！丁度何言っていいのかわかんなくて困ってたとこなのよね。

私は心の中でミシェルのフォローにガッツポーズ。ミシェルって意外と気配り上手なのよね。

「でも俺は原則として聞かれた以上のことは話せない」

「何言ってんの。そんな面倒なことに縛られてばっかだからダメなんだよ。どうせもうこの世界は」

「…わかってる」

リーエンがミシェルの言葉を遮る。

さっきまでのリーエンからは想像もつかないような、感情を無理に抑えた低い声。

不自然なところで途切れた会話。

ミシェルが何を言おうとしたのか私は知らない。けれど、私はまだそれが何なのかは知らなくていいような気がした。

だって、リーエンがあんなにも辛そうで、苦しそうで、悔しそうな顔してたから。

「ねえ！私…白兎のことが知りたい。何故白兎は私の世界に居たのか、白兎とは一体どんな存在なのか」

だから私は敢えて違う事を聞く。

本来なら今頃既に出会っていたであろう者を考える。

リーエンはにっこりと紳士的な笑みを浮かべた。

「“貴女が訊ねるならば、何でもお答え致しましょう”」

リーエンは白兎について話始める前に、私達に紅茶とお菓子を進めた。

どうやら堅苦しい会話は嫌みたい。

「“白兎”は“連れてくる者”の役目を背負う者。歴代“アリス”はその全員が“白兎”によってこの世界に連れてこられてる。そして今回の“白兎”はブラパン・レーヴ＜夢幻（むげん）の白兎＞ことレーヴ。君をこの世界に連れてきた張本人だ」

あの兎耳の生えた明らかおかしな人ね。顔は見てないけど。

私は紅茶を飲みながら少し前の出来事を思い返した。

「レーヴが君の世界に居たのは恐らく、彼が君の世界に迷い込んだから」

「ええっ！そんなことってあるの？」

「あるでしょ」

平然と答えたのはリーエンではなくミシェル。

「入り口があるなら出口だってある。それが君にとっての常識でしょ？」

にっこり微笑んで片目を瞑るミシェル。ウィンクが様になりすぎてて逆に怖いわ。

「そうね」

「この世界は、ところどころに綻びが生じてる。それは君の世界も同じ事だけれど。白兎は綻び―穴に落ちやすいんだ。体質…なのかは俺にもわからないけれど」

リーエンが分かりやすく説明してくれる。

「それじゃあ、その綻びっていうのが、他の世界に通じる穴ってことなの？」

「その通り。藍琉の世界には、神隠しってものが昔から存在してるだろ？それは大半は事件に巻き込まれ何らかの形で抹消された人

がほとんどだけど、中にはほんの一握りくらい、他の世界に落ちた人もいる」

何か前半物騒な事言ってた気もするけど…そこはあえて流そう。話が脱線しそうだし。

「私もその一人だと」

「そう。白兎に連れてこられた、哀れな被害者」

「でも藍琉のことだし、興味本位で自分からついてったんでしょ？」

うっ！痛いところを…。

横槍を入れたミシェルは意地悪そうににやにやしてる。こら！人で遊んじゃいけません！…まあ本当のことなんだけどさ。

「でも、それは“白兎”の魔力に引き寄せられただけ。藍琉の意志とは半分無関係の事のはず」

「そうなの？」

「そうなの」

半ば強引に納得させられた。

「じゃあ…白兎が私の世界に迷い込んだ時に通ったっていう綻びを探せば、私は元の世界に帰れるの？」

不安半分、期待半分に私が訊ねると、リーエンは難しい顔をする。

「藍琉、申し訳ないんだけど、俺は綻びなんて見たことないし、詳しいことは何もわからないんだ。“教える者”なのにふがいなくて…本当にごめん」

「大丈夫よ！お願いだからしょげないでリーエン」

頭を垂れてしゅんとしてしまったリーエンに私は慌ててそう言った。

「まあそんなの白兎に会っちゃえば聞ける話だしね」

おいコラァァァァ！そこのチェシャ猫空気読めェェェェん？これってあえて空気読まなかった感じ？ああもう何だかよくわかんなくなってきた。考えるのやめよ。

「あっ！そういえばさ」

唐突にミシェルが口を開く。

いきなり大きな声を出すものだから、驚いた私の肩が一瞬跳ねた。

「リーエン、今日一人？」

「そうだけど？」

「じゃあ泊めて」

お願いっと可愛く手を合わせるミシェル。いきなり何を言い出すのかと目を丸くする私。しょうがないなといった顔つきのリーエン。

「部屋もベッドも余ってるし、構わないよ。藍琉も泊まってくでしょ？」

「ええっ！？」

リーエンの紫の瞳に映る戸惑う私。

いきなり出会って泊めてもらうってすごい不躾よね…。でもどうしよう。私お金も何もないし…このままだと野宿になっちゃう？けどやっぱり泊めてもらっちゃうのは気が引けるというか…

「藍琉、人からの厚意はありがたく受け取っとくべきだよ」

一人悶々としている私に、ミシェルが言った。

「あの…じゃあ…泊めていただけますか？」

控えめに言う私を見て、リーエンがにっこりと微笑む。

「勿論」

それから暫くして、私達は優雅なお茶会を終え、リーエンの家へと向かった。

第三幕―教えて帽子屋―（後書き）

こんばんは皆様、朱音です♪
今回は説明的なお話なのでつまらなかったかもしれませんが、今後の展開に重要になってくることが多分見え隠れしていますので☆
今回は名前だけの登場、白兎さんですw
さて、白兎さんは一体いつになったらちゃんとした出番が訪れるんでしょうかね？w↑
そして次回は、藍琉とリーエンとミシェルが一つ屋根の下に！！果たして藍琉はどうなってしまうのでしょうか！？（（どうもならないそれでは、また次幕でお会いしましょう♪

第四幕―お宅訪問、お邪魔します、帽子屋さん♪―

アリス…いつからこの世界は歪んだのだろう？

君がいなくなってから？

幾度となく、来ては去る“アリス”が現れるようになってから？

この世界に綻びが目立ち始め、“アリス”が来る間隔がどんどん短くなってきたのは、只の偶然なんだろうか…？

†　　†　　†

リーエンの家は、思ったより普通だった。

お茶会のあの豪華さから考えると、リーエンの家と言うからにはかなり広く大きな豪邸なのかと思ってたんだけど。

形こそ違えど大きさは小学校の校舎くらいで、外見は煉瓦造りの洒落た家って感じ。それでも十分大きくて豪華なんだけどね。囲いも門もちゃんとある。何だかとっても貴族っぽいお家。

「リーエンはね、金持ちをひけらかすのが好きじゃないんだよ。本当ならこれの十倍くらい広い土地を管理するくらい楽勝なんだけどね。俺は自分が使うのに困らないだけあれば十分だって言って。気障だよねー」

軽口を叩いているミシェルは、眩しい者を見るような瞳で、どの部屋を貸すか見て回っているリーエンの姿を見ていた。

「すごいね。謙虚な姿勢って素敵だと思うよ」

私もつられてリーエンに目を向ける。

あれ？待てよ。何かさっきミシェルが言ってた言葉に引っかかった気が…。

「…ねえ」

「何ー？」

「もしかしてもしかしなくてもリーエンってかなり金持ち？大富豪なの？」

「だってリーエンは伯爵だよ？そりゃ金持ちでしょ」

「は、伯爵！？」

「あれ？俺言わなかったっけ？」

「言ってない言ってない」

「言ったと思ってた」

しれっと言わないで下さい。私そんな話一言も聞いてませんから。

私はため息をつく。

「藍琉、ミシェル。この部屋とこの部屋でどう？向かい合わせ」

いいタイミングで戻ってきたリーエンが部屋に案内してくれる。

連れられてやってきたのは、一階の一番奥の向かいの二部屋だった。

「藍琉はこの世界に来たばかりだし、一番時間を共にしているミシェルが近い方が安心して休めるよね？俺は二階の一番手前の部屋にいるから、何かあったらおいで」

滅茶苦茶紳士だわ。気配り上手で細かいとこまでよく気づく、きっとリーエンは女性の憧れの的ね。世界中の男に爪の垢煎じて飲ませてやりたいくらい。

「わかった。ありがとうリーエン」

「部屋も決まったことだし、お風呂でも入って疲れを癒しておいでよ。バスタオルとか服とかもろもろはミシェルに脱衣所まで持って行かせるから」

「えっ俺パシリ？」

「泊まらせてあげてるんだからそのくらい当然だろ？それとも何？客人面でいるつもりだった？」

「はぁ…そういえばキミってそういう性格だったよね」

リーエンに羨望の眼差しを向けていた私は、彼の思わぬ発言に耳を疑った。

あれ、今聞こえたのって幻聴？

幻聴だよね？紳士なリーエンの口からドス黒発言なんて出るわけないよね？

「あー、そうそう」

私の様子に気づいたミシェルが屈んで私の耳元で小さく耳打ちする。

「藍琉はリーエンのこと紳士だと思ってるみたいだけど、リーエンって優しいのは女性相手の時だけで、おまけにたまに腹ドス黒だから」

私はミシェルの衝撃的発言に言葉を失った。っていうか石化した。

嗚呼…世の中なんて残念なのかしら…。何だか悲しくなってきた。

「じゃっ、藍琉。お風呂入ってきなよ。着替えはちゃんと用意しとくから」

「うん。ありがとミシェル。お風呂入って立ち直ってくるわ」

いろんな意味でどっと疲れが出てきたし、お風呂でリフレッシュね。

風呂場に来た私は脱衣所で衣服を脱ぐ。脱衣所は暖房でもかかっているのか、少しの寒さも感じさせない。

「やっぱりというか何というか…広い。脱衣所に何でこんないっぱい籠あんのよ！ここは銭湯かっ！？」

ついつい一人ツッコミ。我ながら虚しいわ。こんなに広い中独りぼっちでこんなこと言ってるんだから虚しさ倍増ね。

いつまでも脱衣所にいてもしょうがないし、私は風呂場に行く。

「え…何コレ？風呂ってレベルじゃなくない？もう銭湯さえ通り越して温泉の域でしょ」

大浴場だよ…露天風呂までついてるよ…。でも洋風っていうね。洋風の大浴場なのに妙にしっくりくるのはきっと設計とかデザインした人の技量ね。感心するばかりだわ。

「お風呂最高！露天風呂神ー！！」

謎の叫びをあげて風呂に入る私。

実は露天風呂大好きだったりする私。やっぱ旅の後にはお風呂に限るわね。…ん？旅の後じゃなくてまだ始まったばっかり？でもこれで一日の疲れはぬぐい去れるわ！どうでもいいけど私、露天風呂って日本人の心だと思うのよ。この解放感！たまらないっ！！

気持ちよく湯船に浸かる。

ふと視線をずらすと、少し離れたところに…目隠しをしたミシェルの顔！？

「っ！っぎゃあぁあぁあぁぁ！！！！！」

私は驚きのあまり自分でもびっくりするくらいの叫び声をあげていた。

ミシェルはミシェルでかなり驚いたようで、びくっと猫の耳を立てた。…やっぱ普通の人間より耳良いのかしら？ちょっと気になる。

「ぅわっ！ちょっと、いきなり大声出さないでよ。藍琉のせいで耳痛くなったんだけど」

「ごっ、ごめんミシェル」

「ホントだよ」

ミシェルったらご機嫌ナナメ。

目隠ししてるから表情はよく見えないけれど、声色に苛立ちが含まれているのがよぉぉぉぉーーくわかる。

「って！ちょっと待ってよ！今のは確実に私のせいだけじゃないよね！？突然ミシェルが現れたんだもの！しかもあろうことか頭だけ！！」

そう。問題はそこ。何で頭の部分しかないの！？どんな手品よ！別に私今手品見たい訳じゃないんだけど！

「体は必要ないし。それにこんなところに体まで出しちゃったら後でリーエンに誤解を受けて大変なことになりそうだし。俺この家の出入り禁止になりたくないもん」

「ああ、そういうこと」

納得したらしたでいろいろ問題ありそうだけど、何故か妙に納得できた。リーエン怖いもんね。

「そんなことより、俺藍琉に話があって来たんだよ」

頭部分しかないのをそんなことで済ませちゃうミシェルってやっぱりどこか変よね。

と心の中で呟いて、私は目隠しをしている為見えないミシェルの

目を見た。

「話って？」

「お風呂あがったら俺の部屋で待っててくれない？後でゆっくり話がしたいんだよね。白兎に会う前に大事な事を話しておかないといけないから」

「わかった」

「んじゃ俺戻るねー。ごゆっくりー」

私が返事をしたのをしっかり確認してから、そう言い残してミシェルは消えた。

まるで最初からミシェルなんていなかったかのように、辺りは静けさを取り戻す。

その静けさを少しばかり寂しく思いながら藍琉はできるだけ急いで入浴を済ませた。

―コンコンッ

風呂上がりの藍琉は用意された服を着てそのままミシェルの部屋に直行した。

「はい」

部屋のドアをノックすると、部屋の中からミシェルの声が返ってくる。

はい、って返事するなんて、ミシェルって律儀なのかしら。ちょっと意外かも。

「えっと…藍琉です」

他人の部屋というのは妙にドキドキするものだ。

藍琉の声も心なしか震えているようだった。

「入ってー」

しかしそんな事など全く気にせず部屋の中からミシェルは緊張感の無い間延びした口調で言った。

私はガチャリとドアノブを回して部屋に入る。

何でかやたら心拍数が上がった。

「いらっしゃい、藍琉」

ミシェルはベッドの上に座ったままこちらを見て、機嫌良く笑った。

あ。笑うと結構猫っぽいかも。新発見。

「俺、今からお風呂に行ってくるからちょっとその辺でくつろいでて」

「ええっ！？」

突然の発言に驚く私を置き去りにして、振り返りもせずにさっさとミシェルは部屋を出ていってしまった。

えっと…まさかの放置プレイ？
呼び出しておいてそれは酷くないか？
てか私まだミシェルの部屋に来て一分と経ってないんですけど。

・・・どうしよう。

困惑する中、結局私は15分もの間ミシェルの部屋で一人で待たされる羽目になるのであった。

第四幕―お宅訪問、お邪魔します、帽子屋さん♪―（後書き）

第四幕は、帽子屋邸宅内でのちょっとした休息タイムで御座います☆

次回予告ですが、
次回はちょっと黒くなる予定です。
藍琉とミシェルによる黒甘？です。まぁ黒が大半で甘はほっとんどないですけど（（笑
それと、次回は少し長くなるかもしれません。
それではまた、次幕でお会いしましょう♪

第五幕―お話ってなぁに？猫さん―

「ただいまー」

風呂上がりのミシェルが濡れ髪のままで部屋に戻ってきた。

うわなんか濡れて艶やかに光る紫の髪とか滴る水がすっごい色っぽい…

いや、惑わされるな！私はこの男に１５分もの間放置プレイくらったんだぞ！！

「あれ？藍琉怒ってる？」

「当たり前でしょ！いきなり放置くらったら普通怒るって！」

キッとミシェルを睨みつける。

私を怒らせた張本人は事の重大さをわかっていないのか、顔色一つ変えない。

ちょっとは反省しろよ！！

「ごめんごめん。でも俺入浴中の藍琉に、「俺の部屋で待ってて」って言ったはずなんだけど」

「・・・」

私は必死に記憶の糸を手繰り寄せる。

・・・。
・・・・・・。

「あっ！！！」

『お風呂あがったら俺の部屋で待っててくれない？後でゆっくり話がしたいんだよね。白兎に会う前に大事な事を話しておかないといけないから』

「ね？」

思い出した私は瞬間的に顔が熱くなるのを感じた。羞恥のあまりミシェルの顔が見れない。

「ご、ごごごめんミシェル！」

自分が忘れてただけだったなんて…。勝手に怒ってた自分が滑稽すぎてどうしようもない。嗚呼…穴があったら、いや、なくても掘って入りたい。

「いや、俺も悪かったし。待たせてごめんね？」

「うん」

とりあえず仲直り。喧嘩してたのかは微妙なところだけど。
ちらっと顔を上げてミシェルを盗み見ると、穏やかな眼差しで私を見ていた。金色に輝く瞳に無意識に胸が高鳴る。

「あっあの、話って何？」

誤魔化すように話を振る。幸いミシェルは私の顔が更に赤みを帯びたことには気づかなかったようで、安堵した。

しかしそれも束の間。一瞬後には私の言葉を聞いたミシェルの口が、奇妙に、いや、ぞっとするくらいおかしく、つり上がった。

そう、本当に・・・心底ぞっとするくらい。

「・・・白兎の事を、教えてあげる」

何だか、変・・・？

ミシェルの様子がおかしい。醸し出す雰囲気が、表情が、がらりと変わった。私の思い違いでなければ。

いや、思い違うはずがない。ここまで顕著に態度が変われば、どんなに鈍感な人だっておかしいと気づく。

「藍琉、君が望むなら、俺は何だってしてあげる・・・」

こわい。

こわいこわい怖い怖いっ！！

「み・・・しぇる・・・・・・？」

私は、動けなかった。

金色の瞳に絡めとられたかのように体が動かない。

ミシェルの黄金の瞳は、私の心臓を握りつぶそうとしているのではないかと思う程真っ直ぐで。けれどそこに浮かんだ狂気が、私を戦慄させる。

初めてミシェルを、“怖い”と思った。

「ど…どうしたのミシェル？変だよ・・・・」

さっきまでは普通に会話してたのに・・・・。どうして？

絞り出すように声をあげる。

ミシェルは口を半月型につり上げたままで、私を見つめている。

「だって、知りたいんでしょう？白兎の事」

「う・・・ん」

「だったら、白兎の事、教えてあげる。藍琉が望む事は、何でも叶えてあげる・・・」

きもちわるい

半月型の口が、狂気を纏った瞳が、私の全てを捕らえて放さないミシェルが。

気持ち悪い。

私は襲いくる強烈な吐き気に耐えながら、それでもミシェルから視線を外すことが出来なかった。

思い出したかのように寒気が私を包み込む。歯の根が合わず、ガチガチと鳴った。知らない間に体はカタカタと震えていて。

「お、おかしいよミシェル・・・。どう・・・したの？」

私は恐怖にうまく動かせない体で、少しでもミシェルから離れようと後退する。

ミシェルはそんな私をあざ笑うかのように、ゆっくりと一歩ずつ近づいてきた。

どうしよう・・・このままじゃ・・・。

心ばかりが焦って、体がついてこない。逃げなきゃいけないと頭では理解しているのに、それに反して体は全くと言っていいほど言うことを聞かない。

どんどん私とミシェルの距離が縮んでいく。

「やっ…！来ないで！」

掠れた声で叫ぶ。けれどミシェルは歩みを止めない。

とうとう私とミシェルの距離は、手を伸ばせば届く程に縮まってしまった。

「藍琉…」

ミシェルが腕を伸ばす。

もう駄目だと思い、私は反射的にぎゅっときつく目を瞑った。

「なーんてねっ」

直後、優しく甘い声が頭上から降り注ぎ、私を暖かなものが包み込んだ。

驚いて目を開けた私が抱きしめられたのだと気づくのにそう時間はかからなかった。

「ミシェル…？」

私を包み込む体は、暖かく優しい。ふんわりと、甘い匂いがする。

「冗談だよ、藍琉。怖がらせてごめんね？」

抱きしめられているからミシェルが今、どんな顔をしているのか私には見えない。でも、さっきとは違いミシェルの声は私を安心させる。

それでも私はまだミシェルを警戒していた。ミシェルが何を思ってこんな事をしたのか全く理解できなかったから。

力を込めてミシェルの体を押す。それほど力を込めて抱きしめていたわけではないのか、意外にもあっさりと私とミシェルの体は離れた。

自然と見てしまったミシェルの顔は、今までにない真剣さを帯びていて。

私は驚くと同時に、不可解な様子でいるミシェルから目が離せない。

まるで金縛りにでもあったかのように、私はじっとミシェルを見つめていた。

真剣な顔つきのまま、ミシェルは口を開いた。

「藍琉、よく聞いて。君が警戒するべきなのは俺じゃない。俺だったから今のは冗談で済んだけど、君がこれから必ず出会うであろう白兎はそうはいかない」

「どういうこと…？」

私は狼狽える。ミシェルは曇りない真っ直ぐな瞳で私を見て言った。

「いいかい藍琉？白兎は“アリス”に執着してる。“アリス”の為なら何だってするよ？気をつけて。白兎の前で迂闊に発言しちゃダメだ」

「え…？それは…白兎と喋っちゃだめってこと？」

的外れな事を言う私に、ミシェルは困ったような顔をして笑った。

「そうじゃないよ。誰かがいなくなればいいのに、とか、死にたい、とかそういうことを言っちゃダメだってコト」

「言わないよ、そんなこと」

「そ？だったらいいけど」

私の答えを聞いて安心したのか、ミシェルはチェシャ猫という名にふさわしいにんまり顔をした。

「それにしてもさ、俺、迫真の演技だったよね。藍琉超ビビッてたし」

「なっ！ビビッてないもん！！」

ビビッてたけど。

っていうかミシェルがいきなりあんなことするから悪いんじゃない！警告するにしたってもっと他にやり方ってものがあったと思うんだけど！！

「へえー。じゃそういうことにしといてあげる」

なんか腹立つ！

悔しいが何一つ反論できない私に、ミシェルは口が裂けてしまうんじゃないかってくらいにやにやしてる。すごい猫っぽい。…猫だけど。

「もうっ！私自分の部屋に行くからっ！」

こうなったら拗ねてやるわ。

「そう？じゃあ部屋まで送るよ」

あ、あれ？意外とあっさり行かせてくれちゃうの？引き留めてくれるかなーとか淡い期待しちゃったじゃないの。

「ありがと」

ミシェルが先に行って自分の部屋のドアを開けてくれる。

意外と紳士なところもあるのね。

ミシェルの部屋と私の部屋は向かい合わせになっているから、移動が楽だ。

私が自分の部屋のドアを開けるのを見守ってから、ミシェルが口を開いた。

「それじゃ、お休み藍琉。良い夢を」

「お休み。また明日ね」

ドアを閉めるまでミシェルが見ていてくれている。
この世界の一日目は、どうやらミシェルに始まりミシェルに終わるみたい。

ドアを閉めると、私はすぐにベッドに横になり今日一日の出来事を思い返しながら、すぐに寝てしまったのだった…。

第五幕―お話ってなぁに？猫さん―（後書き）

第五幕は、黒甘です！
うまく文章が書けずに実は結構四苦八苦していたり。
情景描写って意外と難しいんですよねぇ；；
精進します

次幕はまだどうするかの予定がたっておりませんので読者の皆様をお待たせしてしまうかもしれません＞＜
ゆったりと待っていていただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6795g/

不思議の国の藍琉

2010年10月10日05時28分発行